

東南アジア

一 現 状

「東南アジア課程は、一九九二年四月、インドネシア・マレーシア語学科とインドシナ語学科の統合改組により誕生した東南アジア語学科を母体に、一九九五年四月発足した広域組織です。本課程は、わが国との関係が益々緊密でその重要性が増している東南アジア全域を教育・研究の対象としていますが、専攻語としては、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア、ビルマ（ミャンマー）の八カ国の主要言語が置かれています。これらの語学教育を基礎に、その地域の言語・文化・歴史・社会・経済などの諸分野の多角的かつ総合的理解を通じて、その深く幅広い学識と良識ある言動で、将来東南アジア地域に関わってゆく優れた人材を養成することを目指しています」（『東京外国語大学 大学案内』一九九八年）。

これが現在のわれわれが属する東南アジア課程である。入学定員は、インドネシア語専攻二〇名、マレーシア語専攻一五名、フィリピン語専攻一五名、タイ語専攻二〇名、ラオス語専攻一〇名、ベトナム語専攻一五名、カンボジア語専攻一〇名、ビルマ語専攻一五名。計一二〇名。

一 前述の入学定員は、いわゆる十八歳人口の急増に合わせて実施されている臨時増募二〇名を含んだもので、一九九

九年度に計画されている臨増分返還後は、臨増以前の定員一〇〇名に戻される。

現在在籍する学生数は、インドネシア語専攻九七（七六）名、マレーシア語専攻七一（四八）名、フィリピン語専攻六四（四三）名、タイ語専攻一〇七（八四）名、ラオス語専攻三六（二〇）名、ベトナム語専攻八五（五四）名、カンボジア語専攻三三（二五）名、ビルマ語専攻七二（五〇）名である。東南アジア課程全体で、五六五（四〇〇）名、（ ）内は内数で女子。全体の七割強である。かつて四百、五百と言えば、一学年全体の数だったと記憶している古い卒業生もいるだろう。専攻語の数といい、学生数といい、現在の東南アジア課程の発展のほどが理解できるかと思う。

東南アジア課程の八つの専攻語について言うと、東南アジア地域には、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア、ビルマの他に、シンガポールとブルネイという二つの国が存在しているが、両国ともマレー語を国語としており、東南アジア課程の八つの専攻語は、この地域の国語をすべて網羅したかたちである。

とはいえ、このような研究・教育対象の拡大に見合う研究・教育スタッフの充実という点になると、まだまだこれからいつそう充実させなければならぬ課題を抱えているというのも、わが東南アジア課程の現状である。

すなわち、三大講座制を採る現在、各専攻語毎に、言語・情報講座、総合文化講座、地域・国際講座に属する専任教官が揃っているのが当然であろうが、目下のところ東南アジア課程の八つの専攻語すべてがこの条件を満たしているわけではない。またこれまでの努力にかかわらず専任の外国人教師採用の枠を獲得できていない専攻語が残っている。この二つはわが東南アジア課程の今後に残された大きな課題である。

三大講座制のもと、職員録も講座別に編成されているが、ここでは専攻語別に専任教官及び外国人教師を紹介する

ことにする。

インドネシア語専攻

佐々木重次（インドネシア語学、教授）、佐藤弘幸（オランダ経済史、教授）、石井和子（ジャワ学、教授）、イムラン・T・アブドゥラ（インドネシア文学、客員教授）。

マレーシア語専攻

小野沢純（マレーシア経済、教授）、正保勇（マレーシア語学、教授）、アンワル・リドゥワン（マレーシア文学、客員教授）。

フィリピン語専攻

山下美知子（フィリピン語学、講師）、小川英文（東南アジア考古学、助教授）。

タイ語専攻

三谷恭之（東南アジア言語学、教授）、宇戸清治（タイ文学、助教授）、小泉順子（タイ社会経済史、助教授）、ウィチャイ・ピアンヌコチョン（タイ語学、客員教授）。

ラオス語専攻

鈴木（旧姓上田）玲子（ラオス語学、講師）、ウティン・ブンニャウオン（ラオス文学、助教授）。

ベトナム語専攻

字根祥夫（ベトナム語学、教授）、川口健一（ベトナム文学、助教授）、今井昭夫（ベトナム思想史、助教授）、ラム・ホン・フォン（ベトナム語学、客員教授）。

カンボジア語専攻

上田広美（カンボジア語学、講師）、岡田知子（カンボジア文学、講師）。

ビルマ語専攻

奥平龍二（ビルマ史・法制史、上座仏教国家論、教授）、斎藤照子（社会経済史、ビルマ地域研究、教授）、ドー・キン・メイ・ヌエ（ビルマ文学、客員教授）。

は六二名を数える。

以上の専任・客員の教官、計二四名に加えて、東南アジア課程の授業編成に一九九八年現在、出講する非常勤講師

二 東南アジア課程の成立

東京外国語学校の時代

次に年代を追って東南アジア課程成立までの変遷をたどってみる。

▽一九〇八（明治四十二）年 東京外国語学校 東洋語速成科馬來語学科

東京外国語学校規則 第一条「本校ハ外国語ニ熟達シ実務ニ適スヘキ者ヲ養成スル目的ヲ以テ歐洲及ビ東洋ノ近世語ヲ教授スル所トス」。

東洋語速成科の開設。馬來語、ヒンドスタニー語、タミル語、蒙古語の各学科が置かれる。こうして、現在の東南アジア課程八専攻語の中ではインドネシア語・マレーシア語が最も古く、一九〇八年以来の歴史をもつことになる。この修業年限一年の馬來語学科は、廃止されるまでの三年間に二二名の卒業生を送り出した。

▽一九一一年（明治四十四）年 馬來語科の本科昇格、暹羅語科の新設

三月をもって東洋語速成科廃止。蒙古語、馬來語、ヒンドスタニー語、タミル語の四学科の本科昇格。暹羅語科が新設される。タイ語のスタートである。暹羅語科、馬來語科が修業年限三年の本科として並ぶことになった。当時の学科目は次のようなものであった。

二 東南アジア課程の成立

各学年共通 修身(二)、國語漢文(二)、体操(三)。(一)内は週時間数。

第一学年 正科語学(六)、英語(二六)、言語学(二)又は法学通論(二)。計二九又は三〇。

第二学年 正科語学(一四)、英語(六)、言語学(二)又は経済学(三)。計三〇又は三一。

第三学年 正科語学(一四)、英語(六)、國際法(二)又は教育学(三)。計三一。

馬來語学科の場合、英語(六)の代わりに蘭語(六)を選択することが出来たので、マレー方面に活躍の場を求めようという者は馬來語プラス英語のコースを、ジャワに雄飛しようという者は馬來語プラス蘭語の組み合わせを選んだであろう。

▽一九一四(大正三)年 暹羅語科、馬來語科の本科一期生の卒業

暹羅語科四名、馬來語科一〇名の本科一期生が卒業。馬來語科はこれ以降継続的に卒業生を出す、他方、暹羅語科は一九一六(大正五)年に二期生を送り出した後、なぜか長い空白期に入る。この学科が次に卒業生を出すのは、一九四四(昭和十九)年なのである。この間、学生募集を行っていないということになる。

▽一九一九(大正八)年 語科を語部に改称

東京外国語学校学則 第一条「本校ハ外国語ニ熟達シ実務ニ適スヘキ者ヲ養成スル目的ヲ以テ現代諸語ヲ教授スル所トス」。

語科の名称が改められ、語部となる。また「……各部ヲ分チテ文科、貿易科、拓殖科トス但シ部ニヨリテハ或科ヲ設ケサルコトアルヘシ」ということで、馬來語部は貿易科、拓殖科のみ、文科は設けられなかった。学科目は次の通

り。学校規則第一条に「実務ニ適スヘキ者ヲ養成スル」とうたう通りのカリキュラムと言うより、まるで南方雄飛の馬來語部お誂え向きのカリキュラム、という感がある。

貿易科

各学年共通 体操教練 (二)。

第一年 修身(実践道徳 一)、外国語(当該国語当該国情 二二三)、国語(二)、商業実務(商業算術 二)、法律(法学通論 二)。

第二年 修身(倫理 一)、外国語(当該国語当該国情 二二二)、国語(二)、経済(経済通論 二)、商業(商業通論 二)、法学(民法 一)。

第三年 修身(倫理、日本道徳の特質 一)、外国語(当該国語当該国情 一四)、商業(外国貿易外国為替、海上保険及海運、商業政策 三)、商業実務(簿記、タイプライティング、実地見学 三)、貿易実務(商業地理、商品分布、商品経済 三)、法律(民法 三、商法 三、国際法 三)。

計 各学年 三二。

拓殖科

貿易科と相違する点は、商業実務や商業にかわる以下の学科目、及び第三年の法律が国際法(一)だけであること。

第一年 農業(農学大意 二)。

第二年 農学(林学大意 二、水産学大意 一)。

第三年 農学(畜産学大意、鉱山学大意、農業経済 五)、測量及土木(土木大意、測量実習 二)、植民衛生(熱帯衛生、寒帯衛生 一)、植民政策(植民史植民政策 二)、植民地事情(商業地理、物産交通等 三)。

二 東南アジア課程の成立

計 各学年 三二。

馬來語部では蘭語、英語のいずれかを選修するとなっている。

▽一九二七（昭和二）年 四年制になる

東京外国語学校学則 第一条「本校ハ外国語ニ熟達シ実務ニ適スヘキ者ヲ養成スル目的ヲ以テ現代諸語及ビ其ノ他ノ学科目ヲ教授スル所トス」。この第一条は変わっていないが、「修業年限ハ四年トス」（学則第四条）。三年制から四年制に変わる。馬來語部で馬來語プラス英語を選じたものは、更に第二外国語の名で蘭語を履修した。

▽一九四〇（昭和十五）年 毎年募集を開始 暹羅語部の学生募集

一九一一（明治四十四）年からほぼ隔年であった学生募集がこの年から毎年になる。同時に、暹羅語部が学生募集を再開。こうして、一九一六（大正五）年の二期生卒業以来の長い空白に終止符を打って、現在で言うタイ語専攻の卒業生が一九四四（昭和十九）年以降継続的に出るようになった。

▽一九四一（昭和十六）年 暹羅語部を泰語部と改称

暹羅が泰に改められ、暹羅語部が泰語部となる。

東京外事専門学校の時代

▽一九四四（昭和十九）年 東京外事専門学校（修業年限三年）

学則第一条「本校ハ専門学校令ニ依リ皇国ノ道ニ則リテ海外諸民族ノ諸事情及ビ其ノ言語ニ関スル高等ノ教育ヲ施シ国家有用ノ人物ヲ錬成スルヲ以テ目的トスル」。

東京外国語学校以来のタイ科（定員二〇名）、マライ科（二〇名）に加えて、新たにビルマ科、フィリピン科が置かれた。但し、ビルマ科、フィリピン科は学生募集を行っていない。

▽一九四五（昭和二十）年 フィリピン科の学生募集

「昭和二十年度 東京外事専門学校入学志願者心得」には「本校ハ海外諸民族ノ諸事情及ビ其ノ言語ニ関スル科目ヲ教授スル所トス」とある。

タイ科三〇名、マライ科三〇名、フィリピン科二〇名を募集するも、初年度に続いてビルマ科の募集はなし。

▽一九四六（昭和二十一）年 マライ科をインドネシヤ科と改称

マライ科をインドネシヤ科、フィリピン科をフィリピン科と改称。

▽一九四八（昭和二十三）年 フィリピン科の一期生卒業

この東京外事専門学校フィリピン科はこの年から卒業生を送り出すが、翌一九四九（昭和二十四）年に東京外事専門学校は新制大学東京外国語大学となり、ビルマ科と共に廃止の憂き目を見る。

こうして、後輩を持たぬ嘆きをかこつ身となった東京外事専門学校フィリピン科四期四八名の卒業生が、一九九二（平成四）年のフィリピン語復活、そして一九九六（平成八）年卒業の若い後輩の登場をどんなに歓喜して迎えたか、想像に難くない。

東京外国語大学の時代

▽一九四九（昭和二十四）年 東京外国語大学 インドネシヤ学科、シヤム学科

学則第一条「本学は、外国語大学基準に従い、外国の言語とそれを基底とする文化一般につき、理論と実践にわたり研究教授し、国際的な活動をするために必要な高い教養を与え、言語を通して外国に関する理解を深めることを目的とする」。この学則第一条は、「外国語大学基準に従い」を削除したかたちで現在も行われている。

第三条に「本学に次の学科を置く」とあり、インドネシヤ学科、シヤム学科が置かれ、外事専門学校時代のフィリピン科、ビルマ科は廃止。ビルマ科は一度も学生募集を行わないままの廃止となった。ビルマ語の再スタートは一九八一（昭和五十六）年まで待つことになる。

外国語学部のみ単科大学なのだが、そういう事情から学内でこの「外国語学部」を意識することは、ながらくなかったと言っているだろう。学則第三条も「本学に次の学科を置く」だし、卒業証書にこれが用いられるのは、現存もつとも新しい卒業証書（卒業証書と学位記とが併記されている形式のもの）の「本学外国語学部〇〇語学科所定の課程を修めて」においてであって、それ以前のものには「外国語学部」の名を使わず、「本学所定の課程を修了し」、「本学インドネシヤ語学科所定の課程を修了し」である。

専攻科目は、インドネシヤ学科でマライ語と蘭語の初級・上級・普通講義・演習及び講読・特殊講義、英語演習及

び講読、卒業論文。シヤム学科でシヤム語の初級・上級・普通講義・演習及び講読・特殊講義、英語演習及び講読、卒業論文である。

▽一九五一（昭和二十六）年 第七部第二類、第三類

インドネシヤ学科、シヤム学科は、第七部（東南アジア圏）第二類（専攻語マライ語・オランダ語）、第三類（専攻語シヤム語）となる。この部類制は一九六一（昭和三十六）年まで行われた。この部類制では「各類にそれぞれ講座を置く」となっていた。

こうして、第七部第二類には「インドネシヤ学講座」が置かれ、その科目としてマライ語又は蘭語の初級・上級・普通講義・特殊講義、共通講義、演習及講読、卒業論文があり、第七部第三類には「シヤム学講座」があつて、その下にシヤム語の初級・上級、普通講義、特殊講義、共通講義、演習及講読、卒業論文が置かれた。

▽一九六一（昭和三十六）年 インドネシア科、タイ科

第七部第二類はインドネシア科、第七部第三類はタイ科となる。科目は、マライおよびオランダ語学、マライおよびオランダ文学、インドネシアおよびオランダ事情（以上インドネシア科）、タイ語学、タイ文学、タイ事情（以上タイ科）である。

▽一九六四（昭和三十九）年 インドネシア語学科、インドシナ語学科

インドネシア科はインドネシア語学科、タイ科は「ベトナム語学文学」を加えてインドシナ語学科となる。学生の

二 東南アジア課程の成立

増員はなく、定員は従前通り二〇名。学生は入学後タイ語とベトナム語のいずれかを選んで履修した。

学則は、第二条「本学に外国語学部を置く」、第三条「本学に外国語専攻科を置く」。専攻科の開設に伴って初めて外国語学部を唱える必要が生じたもの。学科目が次のように整理される。

インドネシア語学科：インドネシア語学文学（専攻語名マライ語がインドネシア語に変わる）、オランダ語学文学（前期必修科目たることを止めて後期での必修となる）、インドネシア事情。

インドシナ語学科：タイ語学文学、ベトナム語学文学、インドシナ事情。

▽一九六六（昭和四十二）年 大学院の開設

第三条は「本学に大学院を置く」となる。インドネシア語学科には、インドネシア語学文学講座、オランダ語学文学講座、インドネシア事情講座。インドシナ語学科には、タイ語学文学講座、ベトナム語学文学講座、インドシナ事情講座が置かれる。

▽一九六八（昭和四十三）年 大学紛争 バリケード封鎖

十月、全共闘によるキャンパス・バリケード封鎖。キャンパスに入れないまま、教授会は湯島聖堂や巣鴨地蔵通りの成光苑など学外を転々とする。

▽一九六九（昭和四十四）年 三月封鎖解除

三月、機動隊による封鎖解除。卒業は六月となる。

▽一九八一（昭和五十六）年 ビルマ語の再スタート

インドシナ語学科に「ビルマ語学文学」が加わり、インドシナ語学科は学生定員一〇名を加えた三〇名となる。一九四四（昭和十九）年、東京外事専門学校に開設され学生募集を行わないまま廃止となったビルマ語の再スタートである。学生の募集は従前通りインドシナ語学科として行い、入学後各自がタイ語、ベトナム語、ビルマ語のいずれかを選んで履修した。

▽一九八四（昭和五十九）年 インドネシア・マレーシア語学科

インドネシア語学科が「マレーシア語学文学」を加えて、インドネシア・マレーシア語学科（定員三〇名）となる。この増員分一〇名を募集定員として、小論文及び面接の二次募集を実施したが、志願者数三四二名、三四倍の競争率を記録。この二次募集は大成功であった。

▽一九八五（昭和六十）年 二次募集

ポルトガル語学科、インドネシア・マレーシア語学科、インドシナ語学科がそれぞれ募集定員一〇名の二次募集を実施した。

▽一九八六（昭和六十二）年 臨時増募

二 東南アジア課程の成立

十八歳人口の増大に対処する臨時増募の開始。それにより、インドネシア・マレーシア語学科の学生定員はプラス五名で三五名、インドシナ語学科の定員はプラス一五名で四五名となる。インドシナ語学科は、募集定員タイ語五名、ベトナム語五名、ビルマ語五名とする二次募集を実施した。

▽一九八七（昭和六十二）年 タイ語・ベトナム語・ビルマ語としての学生募集

インドシナ語科は伝統的に語科として学生を一括募集し、入学後にタイ、ベトナム、ビルマのいずれかを選択させる方式で来ていたが、この年初めてタイ語一五名、ベトナム語一五名、ビルマ語一五名を募集定員とする入試を行った。

▽一九九二（平成四）年 東南アジア語学科 ラオス語・カンボジア語の新設とフィリピン語の復活

インドネシア・マレーシア語学科とインドシナ語学科が合併。既存のインドネシア語、マレーシア語、タイ語、ベトナム語、ビルマ語に、新たにフィリピン語、ラオス語、カンボジア語を加えた八専攻語を擁する東南アジア語学科となる。現在の東南アジア課程の体制がこれで成立。ラオス語、カンボジア語は文字通りの新設だが、フィリピン語は一九四九（昭和二十四）年新制大学発足時の廃止以来の復活である。

講座編成も、これまでのインドネシア語学文学、マレーシア語学文学、インドネシア・マレーシア事情、オランダ語学文学（以上、旧インドネシア・マレーシア語学科）、タイ語学文学、ベトナム語学文学、ビルマ語学文学、インドシナ事情（以上、旧インドシナ語学科）から面目一新して、東南アジア語学、東南アジア文学、東南アジア事情の三講座となる。学生募集は、インドネシア・マレーシア・フィリピン五〇名、タイ・カンボジア三〇名、ベトナム・

ラオス二五名、ビルマー一五名で実施した。

▽一九九三（平成五）年

学生募集はインドネシア語二〇名、マレーシア語一五名、フィリピン語一五名、タイ・カンボジア語三〇名、ベトナム・ラオス語二五名、ビルマ語一五名というかたちで実施した。

▽一九九四（平成六）年

この年は、インドネシア語二〇名、マレーシア語一五名、フィリピン語一五名、タイ・ラオス語三〇名、ベトナム・カンボジア語二五名、ビルマ語一五名を募集した。

東南アジア課程の成立

▽一九九五（平成七）年 東南アジア課程のスタート

外国語学部の七課程三大講座（言語・情報講座、総合文化講座、地域・国際講座）への改組に伴い、東南アジア語学科は、東南アジア課程となる。学生募集は九四年と同じく、インドネシア語二〇名、マレーシア語一五名、フィリピン語一五名、タイ・ラオス語三〇名、ベトナム・カンボジア語二五名、ビルマ語一五名。

▽一九九八（平成十）年 臨時増募返還計画

翌年度に計画されている臨時増募返還（二〇名）に伴い、東南アジア課程の学生定員は二二〇名から一〇〇名とな

る。同時に、インドネシア語の定員を二名減、ベトナム語の定員を二名増とする課程内での定員調整も行い、インドネシア語一八名、マレーシア語一〇名、フィリピン語一五名、タイ語一五名、ラオス語一〇名、ベトナム語一二名、カンボジア語一〇名、ビルマ語一〇名、とする予定である。

三 卒業者および教官

一 東南アジア課程卒業者数一覧

次に東南アジア課程卒業者数一覧を掲げる。「東京外国語大学同窓会名簿」(一九九四年版、東京外語会)とその後の卒業生名簿に基づいて作成した。

インドネシア語専攻

日露戦争(一九〇四—〇五年)から三年目、一九〇八(明治四十一年)年、東京外国語学校東洋語速成科馬來語学科が開設される。これによって、インドネシア語・マレーシア語が東南アジア課程の中では最も長い歴史を持つこととなる。この速成科は廃止されるまでの三年間に二二名の卒業生を送り出した。一九一一(明治四十四)年、馬來語科は本科に昇格する。日韓併合の翌年である。

速成科馬來語学科以来の専任教官は以下の通りである。

村上直次郎(一九一一—一八、東京外国語学校校長 一九〇八—一八)、藤田季荘(一九〇八—〇九)、佐和山彌六(一九一六—一八)、上原訓蔵(一九一九—二四)、朝倉純孝(一九一九—五三、名誉教授)、高田成義(一九二〇)、

東南アジア課程卒業生数内訳

		In	Ma	Ph	T	L	V	Ca	B	
1908	M41									
1909	M42	16								
1910	M43	2								
1911	M44	4								
1912	M45	1								
1913	T2									
1914	T3	10			4					
1915	T4									
1916	T5	5			4					
1917	T6									
1918	T7	10								
1919	T8									
1920	T9	14								
1921	T10									
1922	T11	10								
1923	T12	14								
1924	T13									
1925	T14	7								
1926	T15	16								
1927	S2									
1928	S3	9								
1929	S4	12								
1930	S5									
1931	S6									
1932	S7	11								
1933	S8									
1934	S9	16								
1935	S10									
1936	S11	16								
1937	S12									
1938	S13	19								
1939	S14									
1940	S15	16								
1941	S16	17								
1942	S17									
1943	S18	14								
1944	S19	1			18					
1945	S20	11			11					
1946	S21	5			21					
1947	S22	8			23					
1948	S23	17		15	29					
1949	S24	12		10	10					
1950	S25	7		7	9					
1951	S26	16		16	12					
1952	S27									
1953	S28	12			15					

(続き)

		In	Ma	Ph	T	L	V	Ca	B		
1954	S29	10			10						
1955	S30	4			3						
1956	S31	8			8						
1957	S32	10			8						
1958	S33	13			11						
1959	S34	11			11						
1960	S35	18			17						
1961	S36	16			9						
1962	S37	21			23						
1963	S38	16			15						
1964	S39	12			16						
1965	S40	21			24						
1966	S41	14			17						
1967	S42	23			19						
1968	S43	14			11		5				
1969	S44	18			15		5				
1970	S45	11			5		8				
1971	S46	19			10		7				
1972	S47	17			20		5				
1973	S48	26			9		4				
1974	S49	15			10		4				
1975	S50	14			13		4				
1976	S51	23			10		7				
1977	S52	19			11		11				
1978	S53	20			12		8				
1979	S54	18			6		5				
1980	S55	19			8		7				
1981	S56	13			16		8				
1982	S57	22			8		8				
1983	S58	18			12		8				
1984	S59	17			11		11				
1985	S60	19			11		7		3		
1986	S61	20			23		4		7		
1987	S62	17			17		3		7		
1988	S63	22	7		10		8		8		
1989	H1	15	5		15		9		6		
1990	H2	22	8		10		12		10		
1991	H3	26	10		16		10		13		
1992	H4	17	10		13		8		13		
1993	H5	21	11		17		18		18		
1994	H6	15	7		17		10		12		
1995	H7	18	19		13		10		11		
1996	H8	21	16	3	20	1	15		2	7	
1997	H9	20	17	13	18	2	12		3	14	
1998	H10	18	8	16	24	3	20		11	12	
	#†	1099	118	80	758	6	261		16	141	2479

岡田丈夫（一九二六—三〇）、鳥居御嶽（一九三〇—三五）、齒田顕家（一九三二—五五）、渋沢元則（一九五〇—八一、名譽教授）、伊東定典（一九五五—八一、名譽教授）、佐々木重次（一九六二—）、佐藤弘幸（一九八一—）、佐久間徹（一九八一—八六）、石井和子（一九八六一—）、小野沢純（一九八四—）、正保勇（一九九〇—）。

このうち、村上、佐和山、朝倉、渋沢、佐藤がオランダ語・オランダ事情（東京外国語学校「当該国語及び当該国語」以来の伝統的用語）の担当。上原、高田、岡田、鳥居、齒田、伊東、佐々木、佐久間、石井がインドネシア語（馬來語・マライ語・インドネシア語）・インドネシア事情。小野沢、正保がマレーシア語・マレーシア事情の担当である。

歴代の専任外国人教師を以下に列記する。最初期の外国人教師はマレー出身者であった。すなわち、イブラヒム・ビン・アフマッド（一九一一）、アフマッド・ビン・アンバック（一九一三）、バッチ・ビン・ワンチック（一九一四—二〇）、イブラヒム・ビン・パチャー（一九二二—二四）、アブドゥル・ラニ（一九二五—三三）。そしてこの後にジャワ出身者のW・S・プルワダルミンタ（一九三三—三七）、R・スジョノ（一九三八—四二）、ウマルヤディ・ルミンタ（一九四二—五〇）が続く。このことを思うと、一九八四（昭和五十九）年の「マレーシア語学文学」講座開設は、新設というより、実は一九三二年をもって途切れたマレー語の半世紀ぶりの復活と言った方が正確である。なお、W・S・プルワダルミンタは、戦後のインドネシアを代表する辞書『Kamus Umum Bahasa Indonesia』の編者ブルワダルミンタその人である。

インドネシア語は一九五〇（昭和二十五）年より専任外国人教師を失い、ウマルモヨ（一九五三—五七）、ラデン・バグス・スマントリ（一九五九—五八）、メック・スナルノ（一九五九—六二）、モハマッド・アルシャッド・ノール（一九六三—六六）の非常勤講師に頼るのみという時代が続いた。再び待望の専任を迎えることが出来たのは、



菫田顕家

ヤマダ大学文学部から迎えている。付言すれば、前記のサストラネガラは広島高等師範、ズビール・アスリ氏は陸軍士官学校で学んだかつての南方特別留学生だった。

一九七〇年代以降の非常勤講師は、ザイヌディン・ダエン・パタンガ（一九七三―七六）、トルヤノ・AS（一九七六―）、スマルト（一九八五―八六）、ジョンジョン・ジョハナ（一九八六―八七）、ドミニック・パタオネ（一九八九―九四）である。

非常勤講師を迎えて多彩な講義が開講され始めたのは、一九六〇年代に入ってからと言つてよい。以来現在まで出講した非常勤講師は、永積昭（歴史）、西川五郎（熱帯農業）、馬淵東一（社会人類学）、岸幸一（現代史）、増井正（語学）、鈴木長年（経済発展）、丹羽元一（語学）、石井和子（語学）、萩原宣之（比較政治）、小嶋敏宏（語学）、奥源造（現代史）、滝川勉（土地制度）、鈴木敬蔵（金融為替）、青木俊男（経済法）、安中章夫（歴史）、土屋健治（歴

一九六七（昭和四十二年）、アナス・マルク（一九六七―七〇）からであった。以来、ムスカルナ・サストラネガラ（一九七〇―七五）、モハメッド・ズビル・アスリ（一九七五―七八）、アナス・マスリ（一九七八―七九）、スウディ・ルックン・ハサン（一九八〇―八三）、ウイン・カルジョ（一九八三―九〇）、ストラトノ（一九九〇―九三）、ラムリ・レマン・スモウイダグド（一九九三―九六）、イムラン・T・アブドゥラ（一九九六一）。最近の三名はいずれも交流協定を結んでいるガジ

三 卒業者および教官

史)、後藤乾一(歴史)、正保勇(言語学)、大木昌(歴史)、山下勝男(語学)、間亭谷栄(社会学)、有吉巖(歴史)、内藤能房(経済史)、長井二千代(語学)、倉田勇(文化人類学)、牛江清名(語学)、鍵谷明子(文化人類学)、野村昇(語学)、鈴木佑司(政治)、城田実(語学)、加納啓良(農村経済)、押川典昭(文学)、宮崎恒二(文化人類学)、石井健(語学)、藤田泰伸(農村経済)、村井吉敬(社会)、森山幹弘(スング語)、伊東照司(美術)、水野広祐(経済)、大形里美(語学)、三平則夫(経済)、加藤剛(政治)、内藤耕(コミュニケーション論)、金光男(社会)、の各氏である。

非常勤講師として出講した期間は、土屋健治のわずか一年(一九七三年)から、鈴木長年の計三〇年まで千差万別ながら、それぞれに多大な影響を受講の学生諸君に与えた。

マレーシア語専攻

一九八四(昭和五十九)年、小野沢純を専任教官に迎えてマレーシア講座がスタートした。一九八二年からマハテイル新政権が「ルック・イースト政策」を導入するなど、日本・マレーシア両国の関係緊密化という時代に応えるインドネシア語学科の改組として実現したものである。歴史的に見れば、かつての馬來語の「半世紀ぶりの復活」であることはすでに述べた。この改組以前にインドネシア語学科で開設されていたマレーシア関係の講義を担当した非常勤講師は、田中和夫(一九七五―七七)、小野沢純(一九七八―八二)の二名であった。

スタート当時の専任教官は小野沢純のみであった。正保勇が加わったのは一九九〇(平成二年)年。そして一九九七年、開設一三年にしてやっと悲願の専任外国人教官を迎えることができた。一九九六年に学術交流協定を結んだマレ

ーシア国立言語・図書研究所のアンウル・リドワン（一九九七）である。

この間、多数のマレー人非常勤講師の支援を受けた。アブドウル・アジズ・ビン・マスタムに始まり、ハニファ・マリアティ・モハメッド、ラティファ・イスマイル、アブドウル・アジズ・ビン・ハジ・アルシャッド、アドナン・ビン・Mdサレー、ハジ・Abハリム・Abラーマン、ワン・モハマッド・ザクルディン・ビン・ハジ・ワン・マーモッド、サハルディン・ハジ・イスマイル、モハマッド・ザイディ・ビン・ザカリア、ジャリル・カリッド、ドラ・アリ、スマン・アフマッド、ワルティ・キミ、イスマイル・プユン、モハマッド・タジュディン・ビン・ドン、ノール・アルフダ・ビンティ・アブドウル・カリム、ワン・ハナフィ・ビン・ワン・マツト、Mhザキ・ディン、Mhナスルディン・ビン・Mhアヒ、Abラヒム・Mhノール、アフマッド・ザキ・アンソレ、ノール・ザリ・ビン・ハマツト、イスハック・Mhナスリ、バハルディン・モハメッド、フアリダ・モハマッドの総勢二五名である。マレーシアの国家公務員として大学院に留学中の方に依頼することが多く、そのため交代が頻繁にならざるを得なかった。

開設以来の非常勤講師には、森元繁（語学）、堀井健三（農村経済）、生田滋（歴史）、原不二夫（華人社会論）、木村陸男（政治）、黒柳米司（外交）、中原道子（文学）、平戸幹夫（地理）、鈴木佑司（政治）、ヘレン藤本（社会）、野村亨（歴史）、佐藤孝一（政治）、鳥居高（政治）がある。

フィリピン語専攻

一九四四（昭和十九）年、東京外事専門学校にフィリピン科が開設された。一九四二（昭和十七）年の日本軍のマニラ占領の二年後である。このフィリピン科は、この開設初年度には学生募集をしていない。そして翌一九四五（昭

和二十)年から学生二〇名を募集し(一九四六年、フィリピン科と改称)、一九四九(昭和二十四)年、東京外国語大学の発足時に廃止されるまでに、四期四八名の卒業生を出している。

「昭和二十年度東京外事専門学校入学志願者心得」は、「募集科及び人員」表上段に第一部として支那科六〇名、蒙古科三〇名、タイ科三〇名、マライ科三〇名、インド科三〇名、イスパニア科三〇名、ポルトガル科二〇名、と印刷されており、そのインド科の脇に並べて、「フィリピン科二〇名(見込)」のゴム印が押されている。如何にも急遽募集を決めた、という体裁である。

ちょうどこの戦後期の資料が大学に欠けているので、当時の卒業生の記したもの(「笠井先生の思い出とタガログ語」昭和二十六年フィリピン語卒小島憲和「追憶 笠井鎮夫先生」笠井鎮先生を偲ぶ会、大学書林、一九九〇年)に従うと、フィリピン科の語学の授業は英語、スペイン語、タガログ語。タガログ語の授業は一年の時は週六時間、二、三年では四時間。最初は笠井鎮夫先生、のちにフィリッピン二世のホームイン・宮崎氏が担当、とある。「タガログ語語彙」(三省堂、一九四四年一月)の著書があるイスパニア科長笠井鎮夫がフィリッピン科長を兼任してタガログ語の授業を担当した。

一九九二(平成四)年開設の東南アジア語学科フィリピン語専攻は、この東京外事専門学校フィリピン科の四十年ぶりの復活ということになる。フィリピン語専攻は一九九六(平成八)年から卒業生を送り出しているが、若い後輩の登場をこの先輩たちが如何に歓喜して迎えたか想像に難くない。

専任教官は、山下美知子(一九九二)、小川英文(一九九四)の二名である。専任外国人教師の獲得がフィリピン語専攻のかかえた今後の重要課題になっている。

開設以来の非常勤講師は、リース・カセル・シュッツ、武井ソコロ、島田ビトウィン・パプロ、イルマ・ペネイラ、

池端雪浦（歴史）、中西徹（経済）、藤原帰一（政治）、結城史隆（文化人類学）、早瀬晋三（歴史）、成家克徳（社会学）の各氏である。

フィリピン国立大学と交流協定を結んでおり、毎年一名の留学生を交換している。

タイ語専攻

一九一一年（明治四十四）年、馬來語学科の本科昇格と共に暹羅語科が新設される。タイ語のスタートである。

このように東南アジア課程の中で同じようにもつとも古い両語科であるが、一九一四（大正三）年、暹羅語科四名、馬來語科一〇名の本科一期生卒業後、馬來語科がずっと卒業生を出す一方で、暹羅語科は一九一六（大正五）年に二期生を送り出した後、長い空白期に入るなど、両学科のその後の歩みには対照的なところがある。

タイ語専攻の歴史には次のような時期を示すことができよう。

▽大正初期

一九一四（大正三）年に一期生四名、一九一六（大正五）年に二期生四名を送り出す。ナイ・ピン（一九二二）、ナイ・プー（一九二二）、ブンヤット（一九二二―一五）、これが今知りうる当時の教官である。

▽戦前の長い空白期

東南アジア課程卒業生数一覧を見れば一目瞭然の長い空白期だが、この間、タイ語は廃止されていたというより、学生募集を行わなかったと言うのが正確なようである。

▽戦中―戦後期

七月、第二次近衛内閣「大東亜共栄圏」建設を声明。十二月、日本・タイ攻守同盟という一九四〇（昭和十五年）年、暹羅語部の学生募集が再開された。この年は、馬來語がそれまでほぼ隔年の学生募集から毎年募集になった年でもあった。こうして、一九一六（大正五）年の二期生卒業以来の長い空白に終止符を打って、現在言うタイ語専攻の卒業生が一九四四（昭和十九）年以降、継続的に出るようになった。佐藤致考（一九四一―四五）、山口武（一九四一―四六）、また、レック・メナルチ（一九三七）、プラゴップ・プカマーン（一九三八、一九四一―四二）、マーニツト・パーヤツカンダナ（一九三九）が、今知りうる当時の教官である。

このように学科開設の年から見れば馬來語と同じく古くとも、タイ語の専門学校時代は意外に短い。その卒業生は、大正の二期の他に、この一九四四（昭和十九）年―一九五五（昭和三十）年の外国語学校卒業生三期、外事専門学校卒業生五期のみである。

▽新制大学発足前後から現在

現在のタイ語専攻につながる伝統は、そんなわけでむしろ新しく、一九四五（昭和二十）年の河部利夫着任、新制大学発足翌年の一九五〇（昭和二十五）年の松山納着任という新制大学発足をはさんだ時期から形成されてきたと見てよからう。「大学案内」の「タイ語専攻は、本学が新制大学として発足した当時からすでに開設されていて卒業生も大勢います」（「東京外国語大学 大学案内」一九九〇年）という文言にも、そんな気分が漂う。

この期以降現在に至る専任教官は、河部利夫（一九四五―六五・三）、アジア・アフリカ言語文化研究所 一九六五・四―七七、名誉教授）、松山納（一九五〇―八二、図書館長 一九七四―七六、名誉教授）、中島慰（一九五一―



中島 慰

八六)、田中忠治(一九六九—一九九三、学生部長 一九八二—一九八六・三、名誉教授)、三谷恭之(一九八二)、宇戸清治(一九八六)、小泉順子(一九九三)である。このように、タイ語専攻は現在の三講座制の各講座に属する教官をもっている。

これまでのタイ人非常勤講師は、飯塚ウライ、プラボン・ボディパクテイ、ナリニー、アヌアイ・イサラクーン・ナアユタヤ、チャンティン・ブラッド、プラパンサック・カモンペット、ブルット・ウパツムパノン、ラワン・チョンハ・サワデイクン、ブラサート・チツチワタナボン、タニタ・ターパナワット、ニウエート・ターパナスット、ピチエート・マオラノン、カンチャナー・マオラノン、ワラパン・アリアウイリヤナン、ナターヤ・ヤマカノンである。

専任の外国人教師は、チャンタナー保川(一九七四—一九八一)、ウイチャイ・ピアンヌコチョン(一九八二)である。

日本人非常勤講師は、尾野秀一(語学)、田中忠治(タイ事情)、永積昭(歴史)、王瑜(華僑論)、市川健次郎(低開発国論)、森幹男(文学)、大林太良(民族誌)、青野博昭(政治)、北村甫(ビルマ語学)、河合正子(語学)、坂本恭章(カンボジア語)、斎藤一夫(経済開発論)、桜田郁夫(語学)、伊東昭司(東南アジア美術史)、坂本比奈子(語学)、岩城雄次郎(文学)、村嶋英治(政治)、石沢良昭(歴史)、末広昭(経済)、田中教照(南方仏教)、水野潔(語学)、谷口興二(経済)、池本幸生(経済)、小泉順子(歴史)、重富真一(経済)、山田均(宗教)、飯田順三(比較

法)、原洋之介(経済)、松園祐子(社会)、橋本泰子(家族論)となっている。

一九九〇年からはシーナカリンウィロート大学との間に学術交流協定を結び、同大学の教官を研究生として受け入れる他、毎年、三名程度の交換留学生を派遣し合っている。今後は共同研究などの企画もなされている。

ラオス語専攻

「大学でラオス語が正規に教えられているのは全国で本学が唯一であり、世界でも旧植民地宗主国フランスなど数えるほどしかありません」(「大学案内」一九九八年)。このラオス語専攻は、一九九二(平成四)年、インドネシア・マレーシア語学科とインドシナ語学科が合併、東南アジア語学科となったときに、フィリピン語、カンボジア語と共に開設され、一九九六年より卒業生を出している。

当初、ラオス語専攻を選んだ者も一年次はタイ語を履修し、二年次からラオス語を履修するという形態をとっていた。一年次からラオス語を履修するように改められたのは、鈴木(旧姓上田)玲子が着任する一九九六年度からである。専任教官は鈴木玲子(一九九六―)、ウティン・ブンニャウォン(一九九八―)。「国立又は公立の大学における外国人教員の任用に関する特別措置法」による任用)。

これまでの非常勤講師は、チャントソン・インタヴォン(ラオス事情)、星野龍夫(文化史)、竹原茂(語学)、ポーンケオ・チャントマリ(語学)、林幸夫(東南アジア仏教)、飯島明子(文学)、菊池陽子(歴史)、鈴木基義(開発経済)、新谷忠彦(言語学)、小坂隆一(言語学)の各氏である。

なお今年一九九八年度、日本の大学としては初めてラオス国立大学と大学間交流協定を締結。本学からすでに留学

生を送っており、一九九九年からは双方の交換留学が始まる。

ベトナム語専攻

一九六〇（昭和三十五）年十二月、南ベトナム民族解放戦線成立に始まったベトナム戦争は激しさを加え、一九六五年ついに米軍の北爆開始となる。その北爆開始の前年（東京オリンピック開催の年でもあった）の一九六四（昭和三十九）年、タイ科は「ベトナム語学文学」を加えて、タイ語学文学、ベトナム語学文学、インドシナ事情の三つの学科目をもつインドシナ語学科となった。

これは学生の増員は伴わない改組で、学生定員は従前通り二〇名。学生は入学後タイ語とベトナム語のいずれかを選んで履修することになった。「タイ語に入ったつもりでいたら、急にタイ語とベトナム語のどれかを選べと言われて驚いた」という一期生の証言もあり、この改組は受験生にはあまり徹底していなかったものと見える。専任教官の着任は翌年。初年度のベトナム語は、非常勤講師三根谷徹の肩にかかった。

開設以来の専任教官は、竹内与之助（一九六五―八五・三）、宇根祥夫（一九七五―）、川口健一（一九八四―）、今井昭夫（一九八八―）の四名である。

初代の外国人教師はグエン・カック・カム（一九六七―七三）。この当時はまだ三年間辛抱すれば、専任の外国人教師を迎えられた時代であった。以降、グエン・カオ・ダム（一九七四―七六）、チン・ホ・ホア（一九七七―八〇）、レ・クオック・ヴィン（一九八一―八四）、グエン・ティ・カイン（一九八五―八六）、ツエン・スワン・ルオ



竹内与之助

ン（一九八七―八八）、ホワン・チョン・フィエン（一九八九―九二）、グエン・ヴァン・フェ（一九九二―九四）、ラム・ホン・フォン（一九九五―）となっている。
初代のグエン・カック・カム以外ほとんどは、現在大学間交流協定を結んでいるハノイ国家大学（旧ハノイ総合大学）から迎えている。

開設以来これまで非常勤講師を務めたのは、ダム・クワン・トゥアン、グエン・ドゥク・ホーエ、ファン・ゴック・ピック、チャン・ベト・ホン、グエン・ホン・クワン、グエン・ディク・ホアン、レー・パン・クイー、ホイーン・トリリー・チャイン、三根谷徹（言語学）、松元洋（語学）、对比地千代子（語学）、真保潤一郎（政治経済論）、藤田勇（政治・経済）、三尾忠志（政治・経済）、木村哲三郎（政治史）、小林慶三（語学）、日隈真澄（語学）、村野勉（経済）、古田元夫（現代史）、桜井由身雄（歴史学）、栗原浩英（現代史）、竹内郁雄（経済）、加藤栄（文学）、春日淳（語学）がいる。

なお、ベトナムでの日本語熱の高まった一九八〇年代より、協定先大学などから毎年三、四名の留学生が日本語・日本文化の研究のために本学に来ており、ベトナム語教官は彼らの大学院進学準備にかなりの時間をさいて協力している。ハノイやホーチミン市へ留学する本学の学生も近年着実に増加している。

カンボジア語専攻

カンボジア語専攻は、一九九二（平成四）年にインドネシア・

マレーシア語学科とインドシナ語学科が合併、東南アジア語学科となったとき、フィリピン語、ラオス語と共に加わり、一九九六年より卒業生を出している。四年間体系的にカンボジアのことを学ぶことができる日本で唯一の場である。

坂本恭章（アジア・アフリカ言語文化研究所教授）が併任教授（一九九二―一九六、名誉教授）として、非常勤講師ペン・セタリン（一九九二―）、ネアック・ソック・チョムラン（一九九三―）と共に一期生以下の教育に情熱を傾けた後を、上田広美（言語、一九九七―）、岡田知子（文学、一九九七―）が引き継いでいる。

なおこの間、ニュオン・カン（一九九四―一九六）が外国人任用法（正式には「国立又は公立の大学における外国人教員の任用に関する特別措置法」）による教授として任用された。

開設以来の非常勤講師は、右に挙げたペン・セタリン、ネアック・ソック・チョムランの他、カン・スオン、峰岸真琴（言語学）、友田錫（政治）、天川直子（政治・経済）、川口正樹（語学）、笹川秀夫（文学）、高橋宏明（歴史）、三上直光（語学）、種瀬陽子（東南アジア音楽）、吹抜悠子（歴史）、石澤良昭（歴史）がある。

ビルマ語専攻

一九四四（昭和十九）年、東京外事専門学校にビルマ科が開設された。一九四二（昭和十七）年、日本軍のヤンゴン進駐の二年後である。同時に開設されたフィリピン科が翌年から学生募集を行うのに対して、このビルマ科は学生募集を行わないまま、一九四九（昭和二十四）年の新制大学発足時に廃止となった。

一九八一（昭和五十六）年、インドシナ語学科に「ビルマ語学文学」講座として加わったビルマ語は、そのビルマ

語の再スタートということになる。ビルマとは、戦後は賠償協定がもつとも早く締結され、経済技術協力、文化交流が進んでいたが、一九七六（昭和五十一）年には、第一回対ビルマ援助国会議が東京で開催されている。このときのビルマ語開設の背景であろう。インドシナ語学科は、ベトナム語を加えた時に増やしていなかった学生定員をこのときは一〇名増やして定員三〇名の学科となった。

専任教官は、奥平龍二（一九八一―）、斎藤照子（一九八二―）と、客員の外国人教師の三名である。専任の外国人教師は、初代のタン・トゥン（一九八四・一〇―一九八七・三）の着任の年を見ても、ベトナム語専攻の場合と同じように、四年目には着任している。その後、スイー・スイー・ウイン（一九八七・一〇―一九九二・三）、トゥン・ミイン（一九九二・四―一九九四・三）、エイ・チョー（一九九四・四―一九九五・三）ドオ・ポ（一九九五・四―一九九七・三）、キン・メイ・ヌエ（一九九七・四―）と続く。

開設以来、出講した非常勤講師には、ティン・アウン、ドオ・キン・イー、テレサ・イケヤ、ナイ・パン・フラ、ティン・ティン・テイ、タン・タン・ミイン、土橋泰子（文学）、田村克巳（文化人類学）、桐生稔（政治経済）、藪司郎（言語学）、大野徹（語学・文学）、田辺寿夫（歴史）、南田みどり（文学）、根本敬（政治史）、土佐桂子（文学・人類学）、原田正美（文学）、高橋昭雄（農村問題）、伊東利勝（東南アジア宗教）、澤田英夫（語学・言語学）、岩城高広（語学）、森祖道、田中教照、石上和敬（以上三名はバリ語・仏教）がいる。

なおビルマ語研究室は、外国人教師を主としてヤンゴン大学歴史学部同歴史研究センター、ヤンゴン経済大学から迎えてきた他、これまで多数の客員研究員を受け入れ、研究交流を行っている。

四 東南アジア語学科と『東京外大東南アジア学』

現在、外国人を含めて専任二四名、非常勤講師六二名の大所帯をなすわれわれも、四〇年前は次のようにごぢんまりしたものであった。

第七部第二類（インドネシヤ）

助教授 伊東定典、渋谷元則

非常勤講師 朝倉純孝、藺田顕家

外国人講師 ヨハネス・マリア・ウマンズ、ラデン・バグス・スマントリ

第七部第三類（シヤム）

教授 河部利夫

助教授 松山納

講師 中島慰

非常勤講師 飯塚ウライ、尾野秀一、田中忠治

外国人講師 アムヌアイ・イサラクーン・ナアユタヤ

この一九五八（昭和三十三年）、田中忠治は専攻語の授業の中で「タイ事情」（当時は今言う「地域基礎」、その前身は「前期事情」、が独立していなかった）を講じ、また一九六一（昭和三十六）年には、タイ科の特殊講義として

永積昭「東南アジア植民史」、王瑜「東南アジア華僑社会の文化」が、そして翌一九六二（昭和三十七）年には、インドネシア科に西川五郎「熱帯農産事情」が加わってくる。非常勤講師を迎えての多彩な講義開設の初期の姿である。現在の非常勤講師の数と比べて、如何にも今昔の感が深い。

このわれわれが、一九九五（平成七）年の大講座制への改組という学部改革を先取りするかたちで、一九九二（平成四）年合併し、「東南アジア語学科」への拡充改組を実現した。他の学科の一步先をいつていたわけである。

われわれはもちろん東南アジアの隣人として昔から仲がよく、大学紛争後に始まった新入生オリエンテーションも毎年一緒だった。しかし、共通講義の開設や「東南アジア総合研究」（真保潤一郎ほか）などの試みからさらに踏み出して、一緒に「東南アジア」を作ろうという構想は、元来「インドシナ」のものであった。特にタイ研究者にとつて、「インドシナ」は「仏領インドシナ」を連想させて決して居心地のいい名称でないようだった。こうして、「東南アジア語学科」への拡充改組が、タイ地域研究の田中忠治学生部長の時代に実現を見ることになったのも、あながち偶然ではない。

この東南アジア語学科（一九九二―一九四）の最後の年に第一巻を発行した学科紀要「東京外大東南アジア学」は、一九九八年第四巻（編集・発行者 東京外国語大学東南アジア課程研究室）が出た。ページ数も、一四一ページ、一一一ページ、一六五ページから、二三五ページと飛躍的に増えた。今後も課程紀要として充実発展してゆくだろう。

五 語劇覚え書

「語劇便利帳」一九九八年版（外語祭実行委員会発行）の年表「語劇の歴史」を読むと、一九〇八（明治四十二）

年の項に「外語の語劇に衣装、メーカーアップなど行き過ぎがあるとして文部大臣小松原英太郎によって禁止される。この年、総理大臣桂太郎、俳優市川左團次もみにき、との記録がある」とある。

一九〇八年といえば、馬來語速成科が誕生した年である。語劇の公演がこれほど大きな社会的インパクトをもちえた時代は今や夢の彼方にしても、この外国語学校以来の伝統の語劇は、今もなお外語祭を特徴づける大きな催しである。

かつて語劇は学科全体が取り組むプロジェクトであった。上級生が演出、主役。下級生は脇役、端役、また大道具係。寄付金集めに回る仕事もあった。一九五九（昭和三十四）年、講堂が出来るまでは、大道具類をトラックに積み込んで会場の中野公会堂や池袋公会堂に運んでいたし、それなりの人員を動員できる態勢が要求された。

今の語劇がかつてのそういう語劇と大きく異なるのは、現在にはほぼ二年生のクラスが担う企画として行われていることである。かつての学科主体の語劇がこう変わったのは、大学紛争による中断後、語劇が復活し始めたとき、学科の企画する語劇とクラス有志による語劇が区別され、前者が反対派の全共闘諸君の粉碎の対象になるという事情があったことによる。

こういう流れの中では、少人数のクラスは断然不利である。東南アジア語学科のフィリピン、ラオス、カンボジアが参加し始めた一九九四（平成六）年以降をとると、八専攻語がどこも欠けずに揃った年は一九九五年の一年のみ。比較的により大きな学生数を持つインドネシア、タイ、ベトナムは別として、少人数の専攻語ではどうしても参加できない年が出てしまう。一九九八年は残念ながらラオス語が不参加に終わった。

こうしたなかでユニークなのは、フィリピン語専攻である。ここではフィリピン研究室の強力なサポートもあって「外大フィリピン民族舞踊団」が生まれており、外語祭での公演に止まらず、フィリピン大学に招かれて好評を博す

るなど、日比文化交流の大きな活動を見せている。また同年のマレーシア語専攻は、二年生があきらめた後、上級生有志が急遽名乗りを挙げ、超特急の準備で見事に上演にまで漕ぎ着けて、さすがにキャリアが違うと印象づけた。タイ語専攻のケースを付け加えれば、ここでは例年二回の語劇合宿が行われており、上級生・卒業生もこの合宿には参加して後輩をバックアップしている。毎年の公演を実現しているところはとここで、それ相応の態勢があることが分かる。

われわれは国策の最前線だった。その時代により、文明開化の最前線に、大東亜共栄圏の最前線に、高度経済成長の最前線に先兵を送り出してきた。しばしば泥縄であったのは最前線だったからだ。問題は、今もわれわれが最前線にいるか否か、だろう。東京外国語大学外国語学部東南アジア課程八専攻語の歴史をたどり終えての感慨である。

附 オランダ語

オランダ語教育のスタート

本学の馬來語学科がそれまでの速成科から本科に昇格したのは一九一一（明治四十四）年のことであった。このことは日本人の東南アジアへの進出がいよいよ本格化し、その性格も大きく変わりつつあったことを示している。従来は「からゆきさん」とか「娘子軍」といわれた婦女子が流れ流れて行く果てが東南アジアであったとすると、日露戦争後は商人や企業家の経済的進出が次第に目立つようになっていった。一九〇九（明治四十二）年にはバタヴィア（現ジャカルタ）に日本領事館が開設され、一九一二（明治四十五）年には三井物産がスラバヤ（ジャワ）に進出している。そしてその翌年の一九一三（大正二）年には南洋郵船会社が日本とジャワの間に直通の航路を開設している。

東南アジアでマライ語（マレー語）が通用する地域といえは当時は大きくわけて英領マライ（および海峽植民地シ
ンガポール）と蘭領東インド（いわゆる蘭印）であり、それぞれイギリスとオランダの植民地支配を受けていた。し
たがって商人や企業家が現地で事業を展開する場合、マライ語の知識はもとより、植民地宗主国の言語である英語、
オランダ語の知識も必要とされたことはいうまでもない。こうした事情は当時の本学の関係者にも十分認識されてい
たようで、本科に昇格した馬來語学科では第二次以降、オランダ語を選択履修できるようにはじめから学科目に蘭
語（オランダ語）が組み込まれていた。このように本学におけるオランダ語教育は、本学のルーツと目される幕府の
蛮書調所において大きなウエートを占めていた蘭学研究とははつきりと断絶した形で、マライ語教育の開始と同時に
新たにスタートをきったということが出来る。以下、本学におけるこのオランダ語教育の歩みを追ってみることにし
たい。

馬來語学科では、本科に昇格して二年目の一九一二（明治四十五）年からオランダ語の授業が予定どおり始まった
らしく、教授村上直次郎がはじめてオランダ語担当として職員録に載っている。村上は日欧交渉史の専門家で、一九
〇〇（明治三十三年）年からスペイン語担当の任にあったが、馬來語学科の発足とともにオランダ語に移り、一九一八
（大正七）年まで七年間初代のオランダ語担当教官を務めた。村上はすでに一九〇八（明治四十一年）年から本学の校
長でもあったから、本学のオランダ語教育は最初から校長直々の指導という荣誉に浴していたことになる。村上は一
八九九（明治三十二年）年から一九〇二（明治三十五年）年にかけてスペイン、イタリア、オランダに留学しており、オ
ランダ語はこの時に身につけたと思われる。のちに村上は『長崎オランダ商館の日記』全三巻（岩波書店、一九五八
年）や『バタビヤ城日誌』全三巻（東洋文庫、一九七〇―七五年、その抄訳は一九三八年）の翻訳者として知られて
いる。また一九一五（大正四）年からは村上のほか、佐和山彌六がオランダ語担当の講師として加わり、スタッフ

は二人となった。佐和山は一九〇九（明治四十二）年に本学の露語（ロシア語）学科を卒業後、外交官となり、オランダおよび蘭印で在外勤務についており、その折にオランダ語を学んだのであろう。しかしどのような経緯で本学の教壇に立つことになったのか、その辺の事情はよくわからない。佐和山は村上と同じく一九一八（大正七）年まで講師を務めている。この二人がどのように授業を分担し、どのような教材を用いていたのか、また当時何人くらいの学生がオランダ語の授業を受けていたかについては記録がなく、あきらかではない。ただ当時は、馬來語学科の入学定員は約一五人で、しかも隔年募集であったから、全員がオランダ語を履修したとしても、人数としてはそれほど多くはなかったと思われる。それからこの時期には、まだオランダ語の外国人教師ないしは講師は採用されていない。

オランダ語担当スタッフの充実

オランダ語担当のスタッフが一新されるのは一九一九（大正八）年のことである。校長村上直次郎が東京音楽学校長に転じたのにあわせて佐和山も辞職し、代わってドイツ語教授辻高衡が独語および蘭語（オランダ語）主任を兼ねることになる。辻は一九一七（大正六）年から一九二八（昭和三）年までドイツ語の教授を務めた人で、蘭語主任はわずか一年しか兼任していない。辻は一九〇五年から一九一六年まで一〇年以上にわたってベルリン大学付属東洋語学校の教師を務めていたが、彼のオランダ語歴についてはよくわからない。この一九一九年にはまた馬來語学科第三回卒業生（一九一八〔大正七〕年）の朝倉純孝がオランダ語担当の講師として採用されている。これはいわば本学はえぬきのオランダ語担当者の誕生ということになる。そしてこの年になってはじめてオランダ人講師が任用されて、J・H・クローネマンとJ・ウェステンドルフの二人が同時にオランダ語の講師になっている。この翌年にもやはりオランダ人二人の態勢がとられている。ただしウェステンドルフに代わってJ・M・W・オクセンドルフがあらたに採

用されている。このようにスタッフが強化されたのは、この年からオランダ語は第一年次でも選択履修できるように学則が改められたことと、修業年限一年以内の速成科があらたに設けられたことが関係しているようである。授業時間数もまた大幅にふやされている。また一九二七（昭和二）年からは修業年限が四年になるとともに馬來語部（語部への改称は一九一九「大正八」年から）では外国語乙（英語）のほかにさらに第二外国語としてオランダ語が週二―三時間の必修科目に加えられた。また外国語乙としてオランダ語を週に八―十三時間履修する課程も設けられている。このように馬來語部の中で次第にオランダ語のウエートが大きくなってきていることがわかる。

朝倉は、翌一九二〇（大正九）年には早くも蘭語主任として助教授に昇任し、以後一貫して本学のオランダ語教育において中心的役割を担ってゆく。一九二三（大正十二）年十二月から二年間文部省の在外研究員としてオランダ、ベルギー、アメリカで研究に従事して帰国すると、一九二六（大正十五）年には教授に昇任し、今度は馬來語部主幹、蘭語および馬來語主任として語部の責任者をも務めることになる。

この時期、外国人教師も引き続き採用されているが、一つだけ珍しい点は、ベルギー人が相次いでオランダ語を担当していることである。一九二六（大正十五）年から二七（昭和二）年にはブリュッセル大学のシャルル・ソプリーが、一年おいて一九二九（昭和四）年から三〇年にはパウル・ペーが担当している。この二人はオランダ語のほかにフランス語とドイツ語もあわせて担当しており、いかにもベルギー人らしい。この三つの言葉が公用語になっているベルギーならではのことであろう。こうしたベルギー人の採用は、朝倉がベルギーで在外研究中に築いた人脈に負っているものと思われる。本学でベルギー人がオランダ語を担当したのは、長い歴史の中でもこの二人だけである（ただしフランス語を担当した人は別にいる）。

すでにふれたように、一九一九（大正八）年から本学には修業年限一年以内の速成科が設置された。マライ語とな

らんでオランダ語もこの速成科で学べるようになった。マライ語では一九二一年（大正十）年三月に第一回修了者四名が出ている。オランダ語では一九二七年（昭和二）年に第一回の修了者五名が出ており、引き続き第二回（昭和三）三名、第三回（同四）七名、第四回（同六）三名、第五回（同七）二名、第六回（同八）三名、第七回（同九）七名、第八回（同一一）三名、第九回（同一三）一〇名、第一〇回（同一四）五名、第一一回（同一五）四名、第二一回（同一六）二名というように修了者が出ている。一九四二年（昭和十七）年以降については記録がなく不明である。第一回の修了者の中には、後に日蘭交渉史や東南アジアの日本人町の研究で新生面を切り開いた岩生成一（一九〇一—八八、東大元教授）の名がみえるし、第二回の修了者の中にはやはり歴史学者で東京商科大学元教授の幸田成友（一八七三—一九五四、幸田露伴の弟）がいる。また第八回の修了者の中には、東洋史学の研究で一九九八年（平成十）年の文化勲章を受賞した山本達郎（一九一〇—、東大名誉教授）がはいっている。

戦前・戦中の朝倉の業績

教授朝倉純孝は、戦前戦中を通じて語学関係書や翻訳を数多く世に送り出している。一九三二年（昭和七）年には本学の初等用教科書として『和蘭語教科書』（春陽堂）を出したのを皮切りに、一九三六年（昭和十一年）年には『和蘭語四週間』（大学書林）、翌一九三七年（昭和十二年）には公爵徳川義親との共著『馬來語四週間』（同）、さらに一九四一年（昭和十六）年には『自修蘭印馬來語』（タイムス出版社）と『実用オランダ語会話』（大学書林）を著わしている。とくに『和蘭語四週間』は毎年のように版を重ね、一九四一年（昭和十六）年までに七版七〇〇〇部を数えている。一九四二年（昭和十七）年に日本軍が蘭印を占領すると、オランダ語への関心も盛り上がったようで、この年だけでも八版、九版と続いて六〇〇〇部も出ている。一九四一年（昭和十六）年には、このほかに『馬來語基礎単語四〇〇〇語』



朝倉純孝

も近刊予告が出ているが、実際に出たのかどうか確認はできない。また拓殖大学南親会が一九四三（昭和十八）年に編纂発行した『蘭日辞典』にも編纂委員会顧問として名をつらねている。

翻訳として注目されるのは、太平洋戦争開戦直後の一九四二（昭和十七）年二月に出た、ミユリタテユリ著『蘭印に正義を叫ぶマックス・ハーフェラー』

（タイムス出版社）である。これは近代オランダ文学の最高傑作の一つに数えられている大変有名な小説で、十九世紀のオランダの苛酷な植民地支配の内情をオランダ人自ら内部告発したもので、多くの国の言葉に訳されている。原著のタイトルはただ「マックス・ハーフェラー」（この小説の主人公の名）であるが、これに「蘭印に正義を叫ぶ」といういわくありげな一句をつけ加えたところに訳者朝倉がこの翻訳に込めた思いと意気込みが伝わってきた。そしてまるでこれに呼応し「蘭印に正義を叫ぶ」かのように日本軍は翌三月の一日にジャワに侵攻し、わずか八日間で蘭印を制圧してしまった。日本の文部省と文部大臣は当時日本とオランダは敵国関係にあったにもかかわらず、この敵国の文学書の翻訳を推薦図書に指定したとのことである。またこの翻訳は、当時の日本出版文化協会の推薦図書にもなったといわれている。

外専時代のオランダ語教育

一九四四年からスタートする三年制の東京外事専門学校については資料が乏しく、不明なところが多いが、馬來語部はマライ科に名称を変更しただけで、組織やスタッフの大枠は基本的には変わらなかつたようである。一九四七年の資料によると、授業時間は一年次のみがマライ語週八時間、オランダ語週四時間とちがつているだけで、二年次、三年次になるとどちらも週四時間ずつと同じ時間数になっている。オランダ語は選択科目ではなく必修となつていたと思われる。また速成科も従来通り設けられており、マライ語部および蘭語部という名称になつていた。この時期オランダ語担当のお雇い外国人教師としてヘルマン・アピンハが一九三九（昭和十四）年から一九四六（昭和二十一年）まで教壇に立っているが、戦争中には、とりわけオランダと日本は敵国関係にあつたことから、あらぬ嫌疑をかけられたりして、人知れぬ御苦労も数多くあつたようである。

戦後のオランダ語教育

一九四九（昭和二十四）年に発足した新制の東京外国語大学では、マライ科はインドネシヤ学科と改称された。専攻語学としてはマライ語とオランダ語の二つが必修とされ、単位数はどちらも同じであつた。前期の第一年次、第二年次においてはマライ語、オランダ語とも八単位（週四コマ）が必修となり、後期の普通講義、演習、特殊講義においても必修単位数はマライ語、オランダ語とも全く同じであつた。このように新制大学発足とともにオランダ語はマライ語と対等の扱いをうけることになつた。しかしその後、両者の比率が変えられ、第一年次では五対三、第二年次では四対三というようにマライ語の必修単位数がオランダ語よりも多くなつた。正確にはいつからこのように変更されたか残念ながらわからないが、インドネシヤ学科である以上こうした変更は早晚やむをえないことだったのである。

う。独立を達成したインドネシア共和国は一九五六（昭和三十一年）五月には、オランダとの間に結んだハーグ協定を破棄して、オランダとの連合を解消するに至るが、こうした国際的な動きも関係があったかもしれない。

インドネシア学科発足とともに教授朝倉純孝が引き続き学科主任を務めた。朝倉は一九五六（昭和三十一年）三月に停年退官するが、一九六三（昭和三十八）年三月まで七年間非常勤講師としてそのまま教壇に立った。したがってこの年をもって本学のオランダ語教育に一時代を画した朝倉の長い時代は終わつたといつてよいであろう。一九五六（昭和三十一年）年に本学の名誉教授規程が制定されると、朝倉は初代学長の沢田節蔵とともに名誉教授に推薦された。一九六八（昭和四十四）年には勲三等瑞宝章を受けた。

戦後も朝倉は、いくつかの語学書を精力的に著わしている。順に挙げると、『インドネシア語四週間』（大学書林、一九五二年）、『オランダ語入門』（元々社、一九五六年）、『オランダ語常用六〇〇〇語』（大学書林、一九五九年）、『インドネシア語小辞典』（同、一九六四年）、『英語対照インドネシア語会話』（同、一九六九年）、『オランダ語四週間（改訂第一版）』（同、一九七一年）、『オランダ語会話ハンドブック』（同、一九七五年）、『オランダ文学名作抄』（同、一九七七年）などである。朝倉は一九七八（昭和五十二年）に八十五歳で他界したが、一九八〇年には『オランダ黄金時代史』（大学書林）が、一九八三年には『オランダ語文典』（同）がそれぞれ遺作として出版されている。

オランダ語担当者として一九五〇（昭和二十五年）年に渋沢元則が助手に就任し、オランダ語担当の日本人スタッフは当面二人になっている。渋沢は一九四三（昭和十八）年に馬來語部を卒業しているので、はえぬきのオランダ語担当者としては二代目ということになる。渋沢は一九五五（昭和三十）年に講師、一九五八（昭和三十三年）年に助教、一九六四（昭和三十九）年に教授に昇任し、この間一九六〇（昭和三十五年）年から一年間オランダのエトレヒト大学に留学している。渋沢の業績として特筆すべきは、十六世紀末にアジアに乗り出してきたオランダ人の難解な航海日

記を翻訳していることである。一つはリンスホーテンの『東方案内記』（大航海時代叢書Ⅶ、岩波書店、一九六八年）で、もう一つはハウトマン、ファン・ネックの『東インド諸島への航海』（大航海時代叢書第Ⅱ期第一〇巻、岩波書店、一九八一年）である。渋沢は一九八一年三月に停年退官するまで本学のオランダ語教育に尽くした。同年名譽教授に推薦され、一九九二（平成四）年春には勲三等瑞宝章を授与されている。渋沢の後任として、インドネシア科一九六五（昭和四十）年卒業の佐藤弘幸が赴任して、現在に至っている。

必修科目から選択科目へ

オランダ語教育が思わぬアクシデントに見舞われたのは一九七三（昭和四十八）年のことであつた。この年一部の学生がインドネシア語学科の専攻語学からオランダ語をはずして、全て選択科目にするように強く要求し始めた。学生の要求は、単に負担の軽減をはかることではしかなかつたようであるが、第一年次から新しい言葉を二つ同時に必修の専攻語として学んでゆくのは、当時としてはインドネシア語学科だけであつたから、他語科とのバランスをとるという意味で、結局は学生の要求に応えざるをえなくなつた。同年の教授会決定を経て、翌一九七四（昭和四十九）年から履修方法が変えられた。これによりオランダ語関係の科目は全て後期での選択科目になつた。ただしオランダ語初級は希望さえすれば第二年次から履修できることになつた。またこれを機にオランダ語概論（初級・上級）は全学的に開放され、他語科の学生も履修可能となつた。

こうした変更はたしかに学生にとっては負担の軽減とはなつたが、その反面失われたものも小さくはなかつた。インドネシアの地域研究を歴史的に少しでも深めてゆこうとすれば、今でもオランダ語文献は避けて通れないものとなつており、オランダ語の知識はどうしても必要になる。三五〇年近くに及んだオランダの植民地支配は、その意味で

も今もってさまざまな面でインドネシアに重くのしかかっていると云わなければならぬ。一先学（一九五三）「昭和二十八」年インドネシア科卒業の次のような発言は、改めてわれわれにこの問題の大きさを訴えかけているようである。「インドネシア共和国は独立したが、外大にはかつての植民地時代の名残りのオランダ語教育が行われているというような主張もあった。学生は闘争によりオランダ語を選択化することによって勝利？をおさめたかのようなのであるが、果してこの時代的条件による主張はあれでよかったのであろうか」（『インドネシア研究論叢 伊東・渋沢両教授退官記念論集』、一九八一年、一五一ページ）。しかし残念ながらインドネシア語専攻の学生の中でオランダ語を選択履修する人の数は、年々減りつつあるのが現状である。

他方では、オランダ語をインドネシア語学科から切り離して独立させようという動きは何度かあった。一九六四（昭和三十九）年には定員一五名のオランダ語学科を新設することが教授会で決定され、文部省もこれを認めたが、結局大蔵省の査定で予算化されず、実現しなかった。

オランダ語担当の外国人講師は、戦後の一九四六（昭和二十一）年以来しばらく採用されていなかったが、一九五二（昭和二十七）年からはほぼ途切れなく採用されてきている。さまざまな事情から一二年間で交替する場合が多いが、S・ウィールシンハのように一九六二（昭和三十七）年から一〇年余も務めた講師もいる。またこの時期にオランダ事情についての講義があらたに開設されていることは特筆すべきことであろう。一九六四（昭和三十九）年から一〇年間にわたり栗原福也（東京女子大学名誉教授）が歴史を中心にオランダの事情について講義を担当し、インドネシア語科の学生に対してオランダへの関心を喚起するとともに、オランダ語の知識の必要性をあらためて認識させることになった。

西暦二〇〇〇年は、オランダ船リーフデ号が偶然に九州に来航して四〇〇年の記念の年にあたり、オランダは西洋

諸国の中では日本とはもつとも付き合ひの長い国となっている。先にも触れたように本学のルーツの一つと目される
 蜜書調所ではオランダ語研究は大きなウエートを占めていた。しかしそれにもかかわらず、本学一〇〇年の歴史の中
 ではオランダ語教育は残念ながら必ずしも十分に恵まれた場所を与えられてこなかったように思われる。

オランダ語担当の外国人教師および講師

- 一九一九（大正八）年 J・H・クローネマン、J・ウエステンドルフ、一九二〇（大正九）年 J・H・クローネ
 マン、J・M・W・オクセンドルフ、一九二一（大正十）年 W・バツケル、一九二二（大正十一）年 一九二三年
 J・フェインストラ・カイペル、一九二四（大正十三）年 一九二五年 D・ファン・ヒンローペン・ラベルトン、一
 九二六（大正十五）年 一九二七年 C・ソブリ、一九二八（昭和三）年 J・B・スネレン、一九二九（昭和四）
 年 一九三〇年 P・ペー、一九三一（昭和六）年 J・B・スネレン、一九三三（昭和八）年 一九三八年 J・A・
 カンタ、一九三九（昭和十四）年 一九四六年 H・アピンハ、一九五二（昭和二十七）年 一九五五年 C・V・メウ
 レマンズ、一九五六（昭和三十一年）年 C・アウエハント、一九五七（昭和三十二年）年 一九五九年 J・A・ウーマ
 ンス、一九六〇（昭和三十五年）年 一九六一年 M・J・メイヤー、一九六一（昭和三十六）年 J・W・ル・ポール、
 一九六二（昭和三十七）年 H・ドゥ・フリース、一九六二（昭和三十七）年 一九七三年 S・ウィールシンハ、一
 九七七（昭和五十二）年 一九七九年 J・ドゥ・フリース、一九八〇（昭和五十五）年 一九八四年 J・スホルテン、
 一九八四（昭和五十九）年 一九八七年 E・フェネマ、一九八七（昭和六十二年）年 P・ポスト、一九八七（昭和六
 十二）年 一九八九年 F・ファン・レーウエン、一九九〇（平成二）年 一九九二年 J・スタルパース、一九九三
 （平成五）年 一九九六年 J・ドゥ・モス